

高等学校の部

優秀賞

笑顔になれる場所

大分県立別府翔青高等学校 3年

さかもと はなこ
坂本 華瑚



“私にとってのふるさととはなんだろう” 考えて出てきた答えは、居心地が良く自然と笑顔になれる場所だということである。上手に言葉で言い表せないが、私はふるさとについて考えたことで、ふるさとという存在が心の支えになって日々を過ごしているということがわかった。そして、ふるさがどのようにして私の心の支えになっていると気付けたのか、考えてみた。

私は高校入学と同時に一人暮らしを始めた。一人暮らしという選択をしたのは、生まれ育った場所であり今も家族が住んでいる家から、電車やバスを乗り継ぎ片道2時間以上かかる場所に志望した高校があったからだ。志望校に合格し、中学を卒業した頃の私は、それまで住んでいた竹田市に比べ、都会に見えていた別府市での高校生活に夢を描いていた。最初は新しく出会った人、出会った場所、たくさんのことに目が行き、とても楽しく過ごした。しかし、日が経てば経つほど、自分が疲れているなど感じるが増えた。出会ったばかりの人達、たくさんの人や建物が溢れた街という慣れない環境での生活に、私はずっと肩に力が入った状態で徐々に笑顔が減っていった。

そんな私の姿を見かねた母が、久しぶりの休みに、一度帰っておいでと迎えに来てくれた。車で帰る途中、どんどん緑豊かになっていく窓の外の景色をみて、私は思わず涙が出そうになった。毎日見ていた時には、何の思い入れもなかったはずの場所がすべて特別に思えた。そして、祖父母や従兄弟、幼い頃からの友達にも会え、ほんの些細な会話をするだけで自然と笑顔になった。暮らしている時は面倒くさいなど感じたことも、あまりいい思い出だけではないことも美化されて見えた。その日から2年と少しの高校生活の間、私は休みがあればすぐ帰り、会いたい人に会いに行き、大好きだったお店でご飯を食べるなど、幸せだと感じる時間を多く取るようにした。そうすると気持ちはどんどん明るくなり、相乗効果で別府での生活も新しい友達や環境にも馴染めていき、自然と笑顔になれることが増えてきた。

私は自分にとって居心地がよく、自然と笑顔になることができる場所がふるさとだと考える。もし別府で高校生活を過ごさず、竹田市で中学生の頃と同じように家族と過ごしていたら、ふるさとについても考えることもなかったかもしれない。そして、ふるさとについてどう思うかと聞かれても、全く違う意見を思っていたかもしれない。だがこの経験を通して、私には自分のふるさとについて考え、私のふるさとを多くの人に知ってもらいたいという気持ちが芽生えた。大分市や別府市、そして県外に比べたら、お店や公共交通機関も少なければ、少子高齢化がどんどん進み、The田舎と感じる場所ではあるけれど、このふるさがなくなったら私は困るからだ。そしてとてつもなく寂しい気持ちになるだろう。ふるさとについて考え、そこに気づくことができた私は幸せ者だ。

今後引っ越しをして、私はまた新たな地で生活を始めることも考えられる。そのときはふるさとが増えてもいい。一度離れ、戻ったときに自分にとって居心地が良く、笑顔で過ごせる場所がいくつもあることはとても良いことだと思うからだ。また、大きい範囲でなくとも、ここというピンポイントで当てはまる場所があれば、どんな場所でもふるさとと言っていいと私は考える。みんなの心の支えとしていつもふるさとという存在があり、私のように笑顔で日々を過ごせる人が少しずつでも増えていってほしい。また、自分のふるさとに誇りを持ち、自慢し合い、話せる環境ができれば、いろんな街でもっと暮らしやすいまちづくりが行われていくのではないかと感じる。

みなさんも、一度自分と向き合い考えてみてほしい。“あなたにとって居心地が良く自然と笑顔になれる、そんな場所はどこですか？”